

<実践報告>

中学校社会科における「地域的特色を多面的・多角的に捉え、
地域の在り方について考察する力」の育成を目指した授業の試み

富田 武 信州大学教育学部附属長野中学校
 矢澤拓真 長野県須坂市立東中学校
 武井正樹 信州大学教育学部附属長野中学校
 百田美希 信州大学教育学部附属長野中学校
 篠崎正典 信州大学学術研究院教育学系

Teaching Approaches to Raise the “Abilities to Grasp
Regional Characteristics with Multifaceted Perspective
and to Think about Future Directions of Regions”
in Junior High School Social Studies Lessons

TOMITA Takeshi: Nagano Junior High School Attached to
Faculty of Education, Shinshu University

YAZAWA Takuma: Azuma Junior high School, Suzaka City

TAKEI Masaki: Nagano Junior High School Attached to
Faculty of Education, Shinshu University

MOMOTA Miki: Nagano Junior High School Attached to
Faculty of Education, Shinshu University

SHINOZAKI Masanori: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	生徒の「地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力」を育成するための方法と課題について検討すること。
キーワード	中学校社会科地理的分野 日本 の諸地域 近畿地方 地域の課題
実践の目的	中学校社会科地理的分野の授業改善
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部附属長野中学校 2 年生 (40 名)
実践期間	2021 年 1 月
実践研究の方法と経過	①単元の開発, ②単元の実施, ③②における生徒の「地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力」の高まりの検証.
実践から得られた知見・提言	複数の資料から読み取った地理的事象を関連付けてまとめる活動, 四つの立場から生活と観光の両立を検討する活動は, 地域的特色を多面的・多角的に捉え, 地域の在り方を考察する力を育成する上で有効である.

1. はじめに

新学習指導要領（『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』、以下、『新要領』）における「日本の諸地域」の学習では、その地域の特色を捉えるための適切な考察の仕方を設け、「日本の諸地域の地域的特色や地域の課題とともに事象間の関係性を理解」することを重視している。これは、「諸地域の単なる地誌的な知識の習得に偏重した学習に陥ることなく、動態地誌的な考え方の趣旨に沿った」学習を行うことを意図している。

一方、「日本の諸地域」の次には新たに地域の地理的な課題の解決を目指し、持続可能な地域の将来像を構想する「地域の在り方」が設置された。これにより、「日本の諸地域」での学びを生かして「地域の在り方」の学習をより充実させようとする試みが注目されるようになってきている（佐藤 2021）。よって、「日本の諸地域」と「地域の在り方」の学びを充実させるためにも、今後は「日本の諸地域」から「地域の在り方」へのより良い接続を意識した授業の在り方を検討することが重要な課題になると考える。

本実践の対象クラスでは、「チイキノミカタ～中部地方～」（2020 年 9 月・2 年）で中部地方の地域的特色を地域別に捉える学習に取り組んだ。そこでは、産業を中核とした考察の仕方を基に、複数の資料から読み取った地理的な事象を関連付けて、地域的特色をまとめる活動を位置付けた。この中で、地域的特色を端的に示す地理的な事象を中核とした考察の仕方を基に、複数の資料から読み取った地理的な事象を関連付けて、地域的特色を捉え、地域の在り方について考察しようとする生徒の姿があった。

そこで本実践では、近畿地方の地域的特色を捉え、地域の在り方について検討する学習を構想して実施し、生徒の「地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力」を育成するための方法と課題について明らかにすることを目的とする。手続きは次の通りである。まず、単元開発の意図と教材化について考察する。次に、単元を開発する。その上で、開発した単元を実践し、生徒の「地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力」を育成するための方法と課題について検証する。

2. 単元開発の意図と教材化

2.1 本単元の位置と開発の意図

地理的分野における本実践の位置を示したのが図 1 である。地理的分野での学習は、第 1 学年で「世界の諸地域」（「ワタシの知らない世界」）、第 2 学年で「日本の諸地域」（「チイキノミカタ」）を学んだ上で、「地域の在り方」（「今日から俺は！～長野市～」）に取り組む。この過程で、生徒の「地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力」の育成を目指す。さらには、このような学習は、公民的分野との接続を意識しており、社会科の最終目標である「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての基礎を養う生徒」の育成へとつながるように計画している。したがって、「チイキノミカタ」は、「世界の諸地域」から「地域の在り方」へと学習が展開する中での橋渡しを行う重要な役割を果たす。

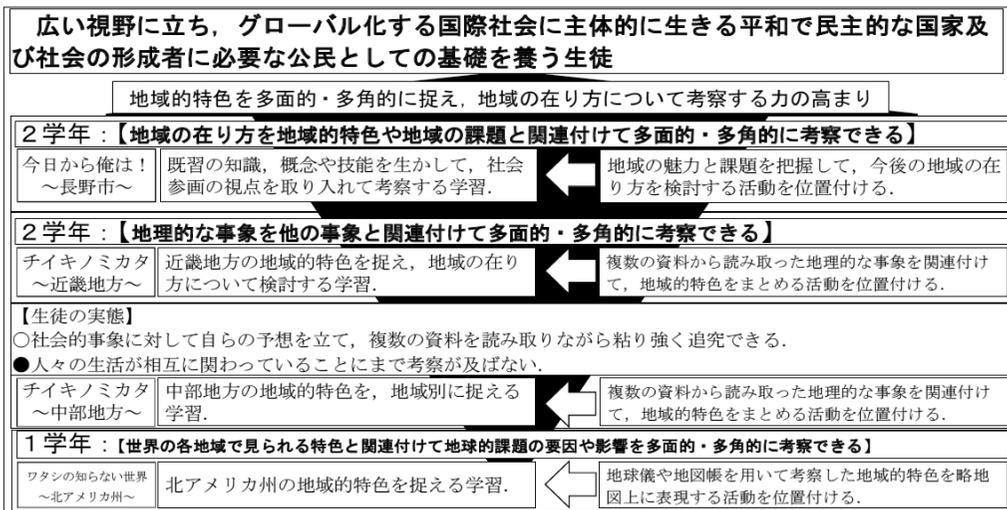


図1 「地域的特色を多面的・多角的に捉え、
これからの地域の在り方について考察する力」を高めるための構想図

「チイキノミカタ」では、七つの地域（九州、中国・四国、近畿、中部、関東、東北、北海道）を扱い、本実践の近畿地方は最終単元として扱う。ここでは、地域の環境問題や環境保全の取組を中核とした考察の仕方を基に、複数の資料から読み取った地理的な事象を関連付けて、地域的特色をまとめる活動を位置付ける。そして、これからの京都市の観光の在り方を見いだす学習において、四つの立場から、生活と観光を両立させる方法を検討する活動を位置付ける。このような学習により、地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力を高めることで、「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての基礎を養う生徒」の姿の具現化に迫ることができると考える。

2.2 教材化

①小単位における教材化

『新要領』では、「日本の諸地域」を学習する際に、次の①～⑤を基にして、空間的相互作用や地域などに着目して、各地域の地域的特色を考察することを定めている。①～⑤は、取り上げる地域に応じた適切なものを一つ選択することとされている。

- ①自然環境を中核とした考察の仕方 ②人口や都市・村落を中核とした考察の仕方 ③産業を中核とした考察の仕方 ④交通や通信を中核とした考察の仕方 ⑤その他の事象を中核とした考察の仕方：(例) 地域の産業、文化の歴史的背景や開発の歴史、地域の環境問題や環境保全の取組、地域の伝統的な生活・文化に関する特色ある事象など

本実践で扱う近畿地方は、琵琶湖や紀伊山地などの豊かな自然、人口が集中する大阪大都市圏、歴史的建造物や文化が多数残る京都・奈良などから構成されており、それぞれ水

質悪化、森林の荒廃、大気汚染、観光公害といった環境問題を抱えてきた。問題の原因は、工場排水や生活排水、輸入の増加や高齢化、産業の衰退、工業発展による公害、観光客の増加など様々である。これらの環境問題に対して、地域住民・企業・行政など立場の異なる人々が環境保全に取り組んできた。地域の環境問題や環境保全の取組から近畿地方を見ていくことで、自然環境、気候、産業などと関わらせて地域的特色を多面的・多角的に捉えられると考える。また、それらの地域的特色を人々の生活と関連付けて考察することで、地理的分野の最終単元である「地域の在り方」で、生徒が生活している地域の特色や課題を追究する上での見方・考え方を働かせることができるようにする。そこで本実践では、⑤を選択し、地域の環境問題や環境保全の取組を中核とした考察の仕方を用いる。

次に、「地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力」を高めるために本実践では、地域の環境問題や環境保全の取組を中核とした考察を基に、複数の資料から読み取った地理的な事象を関連付けて地域的特色をまとめる活動を位置付ける。

第1時、教師は生徒に「近畿地方」のイメージを問う。生徒は「大都会」「日本の歴史や文化の中心地」などと答えるだろう。多くの生徒が好印象をもつ近畿地方に関する資料（1970年～1990年代の近畿地方の様子「琵琶湖」「大阪湾岸」「紀伊山地」）を提示する。これにより、生徒は、環境に関わる問題があることに気付くとともに、これが起きた理由に疑問をもつだろう。そこで教師は、学習問題「近畿地方の環境問題の原因は何だろう。」を据える。生徒は、琵琶湖の赤潮やアオコ、大阪湾岸の大気汚染の様子から工業発展の影響、紀伊山地の森林の土砂崩れの様子から台風などの自然災害による影響と予想するだろう。そこで、教師は原因や影響に関わる資料の読み取りを促すと、生徒は、生活排水、工業発展による工場排水や大気汚染、産業の衰退による後継者不足など様々な原因があること、これらによって水道水の汚染や公害で人々の生活が脅かされていること、森林の消失で自然が破壊されていることなど、多くの影響が出ていることを理解していくだろう。また、すべての環境問題の原因が人間の生活や経済活動によって起きていることにも気付くだろう。さらに、生徒はこれらの問題が解決されたかに疑問をもつだろう。教師は現在の「琵琶湖」「大阪湾岸」「紀伊山地」の様子を提示する。どの様子からも環境問題が起きている様子は見られないことから、生徒はどのようにして問題を解決したのか疑問をもつだろう。そこで教師は、単元の学習問題「近畿地方では、どのようにして環境問題を解決してきたのだろう。」を設定する。生徒は地域住民や企業、行政が環境を守るための対策を行ったからではないかと予想を立て、三つの立場から、どのような活動を行ってきたのかを考察することで、環境保全の方法を見いだせるのではないかと見通しをもつだろう。

第2～4時、生徒は第1時で予想した「地域住民」「企業」「行政」の立場で問題解決に向けた取組に関わる複数の資料を関連付けて考察し、学習カードに整理していく。ここで教師は、複数の資料から読み取った地理的な事象を関連付けて、地域的特色をまとめる活動を位置付ける。生徒は、三つの立場で行ってきた環境保全の取組によって問題が解決さ

れてきたことに気付くだろう。また、琵琶湖や大阪湾岸、紀伊山地周辺の人々の生活の様子から、琵琶湖が大阪大都市圏に暮らす人々の生活を支えていることや阪神工業地帯の発展、日本有数の木材供給地などといった地域的特色を捉えることができるだろう。

②本時における教材化

本時には、これからの京都市の観光はどうあるべきかを見いだす学習において、四つの立場から、生活と観光を両立させる方法を検討する活動を位置付ける。

前時、教師は京都市民の多くが観光客の増加を望んでいないことを伝える。京都市にとって観光産業が大きな収入源や雇用を生み出していることや観光公害に対する取組を学習した生徒は、観光産業による収入や雇用を維持しながら、環境と市民の生活を守るためにできることが他にもあるのではないかと願うだろう。このような生徒の姿から学習問題「これからの京都市の観光はどうあるべきなのだろうか。」を設定する。

生徒は、「京都市民の生活と観光産業の発展を両立できる方法を考えたい。」「地域住民・企業・行政・観光客それぞれにできそうなことがありそうだ。」など、考える上で大切にすべき視点を挙げていくだろう。このような生徒の発言から学習課題「四つの立場から、生活と観光を両立させる方法を考えよう。」を据える。

四つの立場から、生活と観光を両立させる方法について追究を始めた生徒は、地域住民自身の努力、観光客のマナー向上や、行政がそのための条例を制定するなど、それぞれの立場で市民の生活を守る方法を考えていくだろう。また、市民の生活も守りながら観光による経済活動を維持していくための方法として、拝観料の値上げや拝観時間をラッシュの時間とずらす方法などを挙げるだろう。生徒は、「観光産業の発展には、市民の生活環境の保全が必要であり、そのための方法は四つの立場が関わり、協力し合うことだと分かった。」など、地域的特色を人々の生活に関連付けて理解するだろう。

3. 授業の構想

3.1 単元構想

A. 単元名・学年（時間） 「チイキノミカタ～近畿地方～」・2年（7時間扱い）

B. 単元の目標 ※学びに向かう力，人間性等は，単元「日本の諸地域」で総括的に扱う。

①近畿地方の地域的特色や地域の課題を理解することができる。（知識及び技能）

②近畿地方において、地域的特色を各地の環境問題と人々の環境保全に向けた取組を関連付けて、多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察することができる。（思考力、判断力、表現力等）

C. 単元の評価規準

①近畿地方の地域的特色や地域の課題を理解している。（知識・技能）

②近畿地方において、地域的特色を各地の環境問題と人々の環境保全に向けた取組を関連付けて、多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察している。（思考・判断・表現）

D. 単元展開

表1 単元「チイキノミカタ～近畿地方～」の展開（全7時間）

段階	学習活動	◇教師の指導・援助 ◆予想される生徒の意識	○評価規準 ※方法	時間	
導入	1 単元の学習問題を設定し、問題解決に向け、予想を立てる。	<p>◇近畿地方のイメージを問う。</p> <p>◆人口が多くて都会、日本の歴史や文化の中心というイメージ。</p> <p>◇近畿地方に関する資料について調べる場を設ける。</p> <p>◆琵琶湖は汚い、大阪湾岸は工場から煙が大量に出ている。紀伊山地は森林が土砂崩れのようにになっている。</p> <p>◆近畿地方で環境に関する問題が多いのはなぜだろう。</p> <p>◆高度経済成長期に工業が盛んになったこと、人口が集中したこと、外国産の輸入や後継者不足により産業が衰退したことなど、環境問題の原因は様々だけど、すべて人間の生活や経済活動によるものだ。</p> <p>◆どうやってこれらの問題を解決してきたのだろう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>単元の学習問題：近畿地方では、どのようにして環境問題を解決してきたのだろう。</p> </div> <p>◆原因が地域住民だったり、企業だったりするから、環境を改善するために様々な立場の人が関わっていきそう。国や県などの協力もあったのではないだろうか。</p> <p>◆「地域住民」「企業」「行政」の立場から、どのようにして環境問題を解決してきたのかを考えたい。</p> <p>◇生徒の予想から三つの立場で追究していくことを確認する。</p>	① ※学習カード	1	
追究	2 立場の異なる人々の対応という視点から考察する。	<p>◇「地域住民」の立場から、環境問題の解決に向けた対策を考察する活動を位置付ける。</p> <p>◆琵琶湖周辺の小中学校では水質改善活動や環境教育を行っている。紀伊山地の熊野古道は世界遺産に登録されてから観光客が増えた結果、生活道路としても利用している山道が荒れてしまったので、地域住民によって整備されている。</p> <p>◆公害の被害を受けた住民が、大気汚染物質の排出差し止めを求めて裁判を起こしている。</p> <p>◆どの問題に対しても地域住民が環境改善の努力をしている。</p>	①② ※学習カード	2	
		<p>◇「企業」の立場から、環境問題の解決に向けた対策を考察する活動を位置付ける。</p> <p>◆大阪湾岸では、工場や屋根に太陽光による発電設備を設置したり、工業用水のリサイクルを進めたりしている。2025年に大阪湾の夢洲で開催予定の日本国際博覧会でも、最先端の環境技術を生かした施設の整備が進められることになっている。</p> <p>◆和歌山県や三重県では「企業の森づくり活動」など、企業による森林保全の活動が行われている。琵琶湖では、船舶燃料の効率使用に努め、環境負荷を抑える努力をしている。</p> <p>◆経済活動と両立しながら企業も努力していることが分かった。</p>			3
		<p>◇「行政」の立場から、環境問題の解決に向けた対策を考察する活動を位置付ける。</p> <p>◆公害の被害を受けた人への補償や、住民の意見を聞く場を設けるなど、行政による対策が活発に行われている。</p> <p>◆環境を守るために下水道の整備や工場排水の制限に関わる条例を作ったり、森林を保全するための県民税を設けたりしている。</p> <p>◆行政は、地域住民の生活を守ることと企業の経済活動の発展を願って環</p>			

		境問題への対策を行っていることが分かった。		
	3 新たな環境問題について考察する。	<p>◇京都市内でみられる様子を提示し、観光問題について説明する。</p> <p>◆近年、京都を訪れる観光客が急激に増えている。観光による収入が増える一方、「観光公害」と呼ばれる問題が起きている。どんな問題が起きているのだろうか。</p> <p>◆観光客が増えたことでポイ捨てなどのゴミ問題が起きているのではないだろうか。公共交通機関の渋滞も問題になっているのではないだろうか。</p> <p>◆ゴミ問題や渋滞の他にも、撮影禁止エリアでの撮影や地価の高騰、夜の騒音など多くの問題が起きているのではないだろうか。</p> <p>◆京都市民の多くが観光客の増加することを望んでいない。毎年観光客が増えている現状や観光産業が京都市の大きな収入や雇用を生み出していることを踏まえると、京都市の観光はこれからどうあるべきなのだろうか。</p>	①② ※学習カード	5
	4 観光と環境問題を両立させる方法を考察する。	<p>◇「地域住民」「企業」「行政」の立場に「観光客」を加えた四つの視点から、生活と観光を両立するための方法を検討する活動を位置付ける。</p> <p>◆清掃活動など、地域住民の努力も欠かせないが、観光客自身のマナーの向上が必要だ。</p> <p>◆観光客にマナー向上を呼びかけても、効果がないから観光公害が起きている。琵琶湖のときと同じように行政に訴えて条例をつくるのはどうだろうか。</p> <p>◆京都市の歴史的景観や文化財などを生かした観光産業の発展には市民の生活を守る必要があり、四つの立場が協力し合うことの大切さが分かった。</p>		6
まとめ	5 考察したことを基に近畿地方の特色をまとめる。	<p>◇単元の学習問題に対する答えをまとめるように活動を位置付ける。</p> <p>◆近畿地方は、自然豊かで、人口も多く、歴史的な景観や文化財が数多く残る地域だが、環境問題も多く発生している地域でもある。それらの解決に向けて様々な立場の人が関わることで守られている地域であることが分かった。</p> <p>◇単元の学習を振り返る活動を位置付ける。</p> <p>◆中部地方は「産業」だったが、近畿地方では「環境問題と環境保全の取組」を基に学習した。地域に共通して見られることに人々の生活や経済活動と関わらせて追究することで、地域の特色や課題を捉えることができるので、次の関東地方にはどのような共通点、地域的特色や課題があるのか気になる。関東地方でも「産業」や「環境問題や環境保全の取組」から追究してみたい。</p>	①② ※学習カード	7

3.2 本時の展開

A. 主眼

これからの京都市の観光がどうあるべきか考える場面で、四つの立場から生活と観光を両立させる方法を検討することを通して、近畿地方の特色を京都市に暮らす人々の生活と地域的特色を関連付けて説明することができる。

B. 評価規準

四つの立場から生活と観光を両立させる方法を考察し、近畿地方の特色を京都市に暮らす人々の生活と地域的特色を関連付けて説明している。

C. 展開

表2 単元「チイキノミカタ～近畿地方～」(第6時)の展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇教師の指導・援助	時間	備考
問題把握	1 本時の学習の見通しをもつ。	<p>学習問題：これからの京都市の観光は、どうあるべきなのだろうか。</p> <p>ア 京都市民の生活を守りながら、観光による収入や雇用を維持できる方法を考えればよいと思う。</p> <p>イ 地域住民、企業、行政の三つの立場に加えて、問題の原因となっている観光客の立場も含めて考えればよいのではないか。</p>	<p>◇学習問題に対する予想を学習カードに記入するように促す。</p> <p>◇アやイのような考えを全体に位置付け、学習課題を据える。</p>	10分	学習カード
展開	2 友と意見交換をしながら、生活と観光を両立する方法を検討する。	<p>学習課題：四つの立場から、生活と観光を両立させる方法を考えよう。</p> <p>ウ 清掃活動など、地域住民の努力も欠かせないが、観光客自身のマナーの向上が必要だ。</p> <p>エ 観光客にマナー向上を呼びかけても、効果がなから観光公害が起きている。琵琶湖のときと同じように行政に訴えて観光客のマナー向上を目的とした条例をつくるのはどうだろうか。</p> <p>オ 条例によってマナーの改善は期待できるが、渋滞や混雑への対策も欠かせない。例えば、寺社仏閣の拝観料を上げることはどうだろうか。</p>	<p>◇共有シートを配付し、4人グループで、検討するように促す。</p> <p>◇それぞれの立場でできることを付箋に書き、共有シートを用いて整理しながら話し合うようにする。</p>	15分	共有シート
開	3 グループで話し合ったことを全体で共有する。	<p>カ その方法だと観光客数を抑えながら、収入も確保することができるのではないだろうか。さらに拝観時間や開閉店時間、休業日などをずらすことはできないだろうか。朝夕の通勤通学ラッシュの時間や混雑の時期を分けることができれば生活への影響は減らせるかもしれない。</p>	<p>◇整理する際に、共有シートに貼る位置に配慮するように促す。</p> <p>◇机間指導の中で、各グループに全体共有の場で発表する内容を決め出してホワイトボードに記入することを確認する。</p>	15分	ホワイトボード
まとめ	4 課題に対する自分の考えを記入する。	<p>キ 京都市は今後も観光に力を入れていくべきだと思う。日本の歴史や文化を体感できる場所であり、人々の生活を守りながら、観光業を発展させる必要があると思った。</p> <p>ク 京都市の歴史的景観や文化財などを生かした観光産業の発展には市民の生活を守る必要があり、そのための方法は四つの立場が関わり、協力し合うことだと分かった。</p>	<p>◇出された意見を矢印や線で結びながら板書していく。</p> <p>◇本時の課題について、自分の言葉で整理し、学習カードに記入するように促す。</p>	10分	

4. 生徒の「地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力」の高まり

4.1 本時を通じた高まり

S生は、これからの京都市の観光の在り方について生活と観光を両立する点から4人で検討した。以下がその場面である。

S生：僕は、観光客が地域住民の気持ちを考えることができないとこの問題は解決しないと思います。そのためには、観光客自身の意識を高める必要があると思うのですが、何かよい方法はありますか。

- A 生：私は、行政が中心となって観光ガイドブックを作成して、配付することがいいのではないかと考えました。そこには、地域住民が困っていることや、守ってほしいマナーなどが書かれたものが望ましいです。
- B 生：英語や中国語など様々な言語で書かれたものの方がいいよね。
- C 生：私有地に侵入しないように、様々な言語で書かれた進入禁止のステッカーを玄関に貼っておくことも効果的な気がする。それがダメなら、前に学習した滋賀県や大阪府のように条例で禁止して地域住民の生活を守る必要がある。
- S 生：観光客の意識を高めるためには、行政の関わりは欠かせない。さらにゴミ箱を設置することもできそうだ。他の立場の人たちは何かできることはないかな。例えば地域住民は、琵琶湖周辺に暮らす人々のように、ゴミ拾いができそうだ。
- D 生：私は企業の立場から考えました。バスや飲食店で観光客用と地域住民用で座席を分けることで、地域住民も利用しやすくなると思います。
- S 生：なるほど。それなら観光客に対しても、地域住民に対しても企業のイメージは悪くならず、売り上げも減らさずに済むかもしれない。
- A 生：何か観光客のできることで方法というよりも気持ち的なことが多い気がする。
- S 生：観光客の意識を高めるために、他の三つの立場が関わっていかないといけない。

S 生は、地域住民の気持ちを観光客が考える必要性について友に話す姿があった。友はその考えを聞き、行政の立場から観光ガイドブックや進入禁止のステッカーの作成、条例の制定、企業の立場から観光客用と地域住民用で座席を分けるなどの意見を出した。S 生は友の意見を聞いて、近畿地方の環境問題と同様に、京都市に起きている問題の解決も三つの立場が関わっていく必要があることに気付いた。S 生は、京都市の観光を考える中で、地域の発展には立場の異なる人々が関わり合っていること、地域住民の暮らしと経済活動を両立していくことが持続可能な社会をつくりあげることを見いだすことができた。

4.2 単元を通した高まり

S 生は、地域の環境問題や環境保全を中核とした考察の仕方を基に、複数の資料から読み取った地理的な事象を関連付けて、近畿地方の地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察していった。

第1時で、S 生は、環境問題の解決には多くの人々の協力が必要だったのではないかと、という見通しをもった。また、過去に九州地方で取り上げた水俣市の環境問題に関する学習を生かして、近畿地方でも同じように多くの人々が関わって解決しているのではないかと予想することができた。

第2～4時では、S 生は、「地域住民」「企業」「行政」がそれぞれの問題に対して行った取組に関する複数の資料から解決方法を考察した。その中で、地域住民の取組が行政を動かしたこと、企業は環境保全と経済活動の両立ができる取組を行っていること、環境問題の解決に向けて地域住民、企業、行政が関わって持続可能な開発を行っていることを捉えた。

さらに第5、6時で、S 生はこれまでの学習を生かして、立場の異なる人々が相互に関わって地域が成り立っていることを意識しながら生活と観光を両立させる方法を考えた。

このように S 生は、単元を通して、どのようにして環境問題を解決してきたのか、立場の異なる人々の取組を複数の資料を読み取ることを通して、近畿地方に暮らす人々の生活を支える琵琶湖、戦後の近畿地方を支えた阪神工業地帯、紀伊山地の林業、歴史的景観の保全に努める京都市といった、近畿地方の地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察することができた。

単元最終の第 7 時、単元の学習問題に対する考えをまとめる時間で、S 生は環境問題や環境保全の取組を中核とした考察を基に、近畿地方の地域的特色として琵琶湖や阪神工業地帯、歴史的景観などの事象を複数の立場と関連付けて記述した。これは、近畿地方の地域的特色を捉えるために、近畿地方の中核としての環境問題と環境保全を取り上げたことが有効であったことを示している。また、本単元終了後に学習する「地域の在り方」において必要となる視点である「持続可能な開発・発展」についてももつことができた。

一方、N 生は、近畿地方の地域的特色を捉えることができず、単元を通して学んだこととして環境問題の解決の方法を記述した。このことから、N 生にとって単元の学習問題「近畿地方では、どのようにして環境問題を解決してきたのだろう。」が、地域的特色を捉えるための問いではなく、環境問題の解決方法を捉える問いになってしまったと考えられる。しかし、N 生も S 生と同様に、地域が抱える諸課題を解決するために、立場の異なる人々の関わりが必要であることに気付くことができた。

5. おわりに

本実践より、近畿地方の地域的特色を捉える学習において、複数の資料から読み取った地理的な事象を関連付けて地域的特色をまとめる活動を位置付けたり、四つの立場から、生活と観光を両立させる方法を検討する活動を位置付けたりすることは、地域的特色を多面的・多角的に捉え、地域の在り方について考察する力を育成する上で有効であった。

一方で、地域の環境問題や環境保全の取組を中核とした考察の仕方を基に、主体的に追究してきたが、単元の最後のまとめにおいて近畿地方の地域的特色を表す記述が見られず、環境問題を解決する方法について記述する生徒の姿も見られた。これは、地域的特色を多面的・多角的に捉えさせることに重点を置きすぎると、地域の在り方を考察する力を十分に高めることができず、逆に地域の在り方を考察する力を高めることに重点を置きすぎると、地域的特色を多面的・多角的に捉えることが難しくなることを意味する。今後は、二つのバランスを考えた単元構成の在り方について究明していきたい。

文献

文部科学省、2018、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編

佐藤崇、2021、日本の諸地域と組み合わせた地域の在り方、社会科教育、742、pp.62-65

（2021 年 9 月 22 日 受付）